

【生薬名】柴胡 *BUPLEURI RADIX*

【起源植物】ミシマサイコ *Bupleurum falcatum*



【科名】セリ科 *Umbelliferae*

【別名】茈胡一名地薫(神農本草經)

【薬用部分】根

【主成分】サイコサポニン、フィトステロール

【薬性】気味は苦微寒、帰経は心包肝三焦胆に属す

【効能】●解表・解熱・疏肝解鬱・升举陽気

●柴胡は少陽胆経の要薬である。肝胆は表裏の臓であって、また肝経にも入る。その効果は胆を清め、肝を疏し、表裏の熱を和解する。

●解熱、解毒、鎮痛、消炎、鎮静剤として1日3～8g。単品では余り使わず、黄芩、甘草各3gなどを加えるとより効果的

●漢方薬に利用が多く、胸脇苦満や心下痞があり、寒熱往来、胸腹部や脇下部が重苦しく痛むもの、肋膜炎、マラリア、黄疸などに用いる。

●手足の少陽へ行らずには黄芩を補佐とし、手足の厥陰へ行らずには黄連を補佐する(李時珍)

【出典】●柴胡 味苦、能く肝火を瀉し、寒熱往来、瘧疾均しく可なり(薬性歌)

●治心腹去腸胃中結氣。飲食積聚。寒熱邪氣。推陳致新。久服輕身。明目益精。(本經上品)

【備考】●優良品種が静岡の三島地方に自生していたのが名の由来だが、乱獲でほとんど見られなくなった

●平尾台にも別の種の柴胡が自生している

【処方例】●処方例、小柴胡湯、補中益氣湯などに含まれ、柴胡の配合された処方方は皆、柴胡剤とよばれ肝炎や長引く風邪などに利用